

創立間もない山岳会を彩った人々

南川 金一

[2025 年 9 月 23 日の緑爽会での話のあらましを 4 頁にまとめた]

山岳会は 1905 (明治 38) 年 10 月 14 日設立された。会としての活動は、翌明治 39 年から始まり、会員の獲得と『山岳』の発行に着手した。発起人の 7 人が幹事として会務に当たり、それぞれの知人に入会を勧めることと、『山岳』の編集には小島烏水が当たることとし、幹事本人が原稿を書く、あるいは執筆を依頼して各自が応分の頁数について責任を持つこととした。

山岳会は博物学同志会の支会として設立されたから、同会機関誌『博物之友』第 5 年第 29 号 (明治 38 年 11 月 25 日発行) の「會報」欄に「山岳及ビ山岳ニ関係セル一切ノ事ヲ研究スル目的ヲ以テ本會内ニ『山岳会』ト称スル一支会設立サレタリ」との記事が載り、それによって会員に知らされた。博物学同志会の事務所は武田久吉方だったから、山岳会の窓口も武田久吉だった。(①)

山岳会の設立と入会を訴えた「山岳会設立の主旨書」は『山岳』第 1 年第 1 号 (明治 39 年 4 月発行) の巻頭に載った。小島烏水が書いたその原案は明治 38 年末から 39 年始め頃に草稿が出来上がったものと見られている。『山岳』の発行に先立ち、小島烏水は「主旨書」と山岳会設立を知らせる記事を『文庫』『明星』『太陽』の雑誌と新聞社に送った。一方、懇意な『文庫』『明星』の投稿者に手紙を書き、「主旨書」を添えて協力を訴えた。(②)

山岳会設立発起人の一人である高頭仁兵衛は山岳会設立の数年前から『日本山嶽志』(明治 39 年 2 月発行) の編纂に取り組んでいた。その作業が最終場面にさしかかっている時に「山岳会設立の主旨書」の原案を手にして、それを『日本山嶽志』に掲載して読者に山岳会への入会を訴えたいと考えた。しかし、作業はすでに最終校正が終わっている段階であり、窮余の策として、表紙裏にポケットを付けて、別刷りにした「山岳会主意書・規則書」を付録として添付することとした。(③)

山岳会設立後、以上のような①～③の動きがあって、発起人の 7 人はそれぞれの知人に声をかけて山岳会への入会を誘った。明治 39 年の 1 年間で約 400 人の入会者は予想を上回る多さであった。その約 400 人は誰の誘いに応じて、どのような動機で入会したのか——を追いつけてきた。

高学歴者が多かった

明治 40 年の山岳会会員名簿が入会受付順で掲載されているところが興味深い。受付順といつても、①や③によって直接入会を申し込んできた者は少ない。②は小島烏水ファンの文筆家や雑誌への投稿者が多かった。発起人の各々は、自分が誘った入会者を、数人分をまとめて武田久吉のところへ郵送、あるいは幹事会や会合で手渡ししたものと考えられる。高頭仁兵衛は上京時にまとめて武田久吉に手渡していたようだ。それを、受け取った順で整理して、明治 40 年 2 月 20 日現在の会員名簿として編集し、『山岳』第 2 年第 1 号に付録として添付した。

発起人の 7 人はそれぞれに独自の分野を持ち、個性豊かな人物であったから、それを反映する形で多彩な人物が会員となった。発起人の 7 人に共通していることは、当時にあっては高学歴だったことである。当時の学制では、尋常小学校 4 年間が初等教育で、義務教育だった。2～4 年間の高等小学校は中等教育に属した。明治 38 年の中等教育への進学率は男 12%、女 4% だったとする数字がある。中等教育には高等小学校も含んでいるから、それを除けば、中学校や高等女学校への進学率はずっと低かった。発起人の 7 人は、城数馬は帝大卒、梅沢親光と河田黙は一高生、武田久吉は東京外国語学校修了、高頭仁兵衛は二松学舎卒、高野鷹藏は神奈川一中卒で一時東大選科に通っている。小島烏水は横浜商業卒であったが文筆家・編集者としてすでに名を成しており、7 人は当時としてはいずれも「知識階級」に属

した。まずはそれぞれの学校友達や、日頃付き合いの深い者に声を掛けたから、その結果、高学歴の入会者が多くなつた。「類は友を呼ぶ」ものである。入会時は学生であつても、後に学者になって名をはせるようになった入会者も少なくない。

山岳会設立 10 年目の 1914（大正 3）年には延べの入会者数が千人になつた。そのうち東京帝大を卒業した会員が約百人、1 割を占めている。東京帝大は一つの例であつて、設立間もない山岳会には高学歴者が多くを占めた。田口二郎氏は「アルパインクラブは暗黙の門戸主義をとり、会員は紳士的職業に限つた」、それにくらべて「日本山岳会は高等教育の文化主義を暗黙の基準にした」「高等教育的基準が、その自由な数的拡張を阻んだ面がある」（同時代ライブラリー 1995『東西登山史考』）と書いている。しかし、日本山岳会が高等教育を基準にしたことではない、と私は考えている。上述のように、知識層の出身である発起人が知人に声をかけ、「来る者は拒まず」で、入会という形での協力を依頼した。その結果として、知識層が多かつたのである。

会設立当初の年間会費は 1 円だった。この額をどう見るか。明治 38 年の東京の白米の小売相場は 10⁺ 1 円 20 銭だった。日雇い、労働者の日当 44 銭（東京）、大工の日当 85 銭（東京）、明治 43 年の大卒銀行員の初任給 30 円。東大の授業料は 35 円だった。都会で教育を受けるには授業料と下宿代が必要であり、経済的に苦しい家庭の子弟は授業料・寄宿費免除の師範学校へ進んだ。公務員や教員、あるいは安定した企業の社員であれば、趣味のための 1 円の会費は高くはなかつたと思われる。しかし、そのような安定した生活のためには学歴が必要であった。

一方山登りは、案内人や荷担ぎを頼んで何日も山に入るという金のかかる趣味だった。会員になつた結果として、山岳会から送られてくる『山岳』は、当時としては最高の山の情報だったが、一般の会員にとってはレベルが高過ぎた。したがつて、入会して 1 年が過ぎて、翌年の会費請求書が送られて来ると、会費を納入せず除籍扱いになる者も少なくなつた。それだけが原因ではない（死亡や外国への留学がある）が、1920（大正 9）年に会員番号制度が発足して、それに基づく最初の名簿を調べると、それ以前の入会者のうち、1920（大正 9）年名簿に載る会員は 4 分の 1 程度、すなわち 4 分の 3 が会を離れている。その 4 分の 3 に当たる会員が「番号のない会員」で、明治の入会者で 586 人、大正 8 年までの入会者で 59 人、計 645 人いる。番号のない会員が 645 人もいたことは、『日本山岳会百年史』において初めて明らかにされたことである。

私の調査は明治 40 年の会員名簿に載る名前を人名辞典で調べることから始まったが、辞典に名前のある会員が多いことに驚いた。著名人が多いということである。設立間もない山岳会を彩つた、それら会員がどのような経緯で入会したのかを調べておくことは山岳会の使命であると考える。

発起人 7 人の背景

城数馬は明治 21 年帝大法科大学仏法科を卒業。弁護士で東京市議だった。仏法科での同級生に木下友三郎（後に明治大学学長）がいて、木下を山岳会に誘つた。法曹関係者、山草会に集まつていた旧大名家の人物、東京市議会関係者、選挙区である日本橋区の支持者らに声をかけた。

小島鳥水は卒業した横浜商業関係者や勤務先である横浜正金銀行行員に声をかけた。文筆家や雑誌への投稿者は小島鳥水からの手紙に応える形（前述②）で入会したものと考えられる。

高頭仁兵衛は新潟の大地主で東京には人脈を持たなかつたが、新潟県出身というつてをフルに使って人脈を拡げた。地元でも大地主・多額納税者という知名度を利用して山岳会への協力を訴えた。

府立一中を卒業した武田久吉が一高へ進まなかつたのは、英國へ留学する予定があつたからだと思われる。そのため東京外国語学校の撰科ドイツ語科へ進んだ。東京外国語学校を修了して札幌農学校講師として赴任するまで 2 年半ほどの時間があつたのは設立間もない山岳会にとってこの上ない幸いだつた。武田久吉方は博物学同志会の事務所であると同時に山岳会の事務所であった。高野鷹藏の詳しい経

歴は分からない。神奈川一中卒業に8年を要したというから、同級生に誰がいたのかもはつきりしない。博物学同志会横浜支部の中心メンバーだったから、同会横浜支部から山岳会に入会した10人ほどは高野鷹蔵が誘ったと思われる。梅沢親光は明治38~39年には博物学同志会の中心メンバーであり、博物学同志会の会員に山岳会への入会を働きかけるに際し中心的な役割を果たした。河田黙は一高で同級生だった辻村伊助や、養子に入った山川家の人々を誘っている。

発起人が誘ったと思われる入会者

〈城 数馬〉 山草会関係では久留島通簡（豊後森藩）、青木信光（摂津麻田藩）、加藤泰秋（伊予大洲藩）、松平康民（美作津山藩）、松平直之（前橋藩）、伊東祐弘（日向飫肥藩）、酒井忠一（上州伊勢崎藩）、戸沢正巳（羽後新庄藩）らの旧・藩主及び伊集院兼知（薩摩藩）。野口幽香子（二葉保育園開設）、白井光太郎（植物学者）、樋口誠康（陸軍大尉）、森清（森有礼の息）ら。法律・法曹関係では藤井乾助（台湾総督府法院）、木下友三郎（明大学長）、鈴木豊次郎（検事）、宇都宮富三郎、武田千代三郎（秋田・山口・山梨・青森の知事）、膳鉢次郎ら。東京市議会関係では村高幹博（市議会担当記者）、武智直道（台湾製糖社長）・松島剛（地理学者・教育者・英語学者）・加藤佐兵衛（以上市議）ら。日本橋の事業家では小川正直（公証人）、白石萬吉、桑原金之助、正木多吉、金子良吉、島田隆太郎、高津伊兵衛（鰹節の「にんべん」当主）、森田豊蔵らは選挙区の後援者であり、弁護士として相続や債権に関する訴訟の弁護を頼まれたという関係もあったと思われる。

〈小島烏水〉 横浜商業OBの中村房次郎（岩手に松尾鉱業を設立、社長。戦前の横浜政財界のリーダー的存在）、加山道之助（質商、横浜市史料蒐集家）。横浜正金銀行では恒川保、笠間忠一郎、赤井雄、神田騰一、渡邊和太郎、有馬長太郎、三浦慶三郎。文筆家・作家・投稿者では山崎小三（紫紅）、前田次郎（曙山）、小笠原謙吉、畔柳都太郎（芥舟）、滝沢彦太郎（秋曉）、真下瀧郎（飛泉）、久保田俊彦（島木赤彦）、伊良子暉造（清白）、伊藤銀二（銀月）、中尾紫川、河井幸三（酔茗）、正岡芸陽、久保得二（天隨）、島崎春樹（藤村）、與謝野寛（鉄幹）ら。

〈高頭仁兵衛〉 二松学舎では山田謙吉、久保雅友（二松学舎を創設した三島中洲の養女と結婚）、久保輓次郎、三島復（二松学舎の3代目舎長）ら。地理・地質学者では『日本山嶽志』編纂の縁で小川琢治、志賀重昂、山崎直方、田中阿歌麿、佐藤伝蔵、井上禧之助らに山岳会への協力を頼んだ。

博文館関係では大橋進一（三代目社長）、坪谷善四郎、長谷川誠也、中山太郎、田山録弥（花袋）ら。

荻野音松は『日本山嶽志』を読んで特別会員として入会、同書の記述を参考にして冒険的な山登りをして『山岳』に発表、注目された。星野錫はコロタイプ印刷の創業者。そのほか新潟県からの明治39年の入会者が約100人いる。それについては『山岳』第120年（2025年）に書いた。

〈武田久吉〉 小山内薰、中原源治、後藤閑次郎ら。他に博物学同志会の会員。

〈高野鷹蔵〉 博物学同志会横浜支部からの入会者10人。

〈梅沢親光〉 博物学同志会の会員。

〈河田 黙〉 一高で同級だった辻村伊助、那須皓。山川戈登、山川詢。博物学同志会の会員。

博物学同志会からの入会者が約50人いる。武田久吉、梅沢親光、河田黙がそれぞれに誘ったと思われる。住所が神奈川県の会員が約30人いる。うち博物学同志会横浜支部所属会員の10人は主に高野鷹蔵。住所が長野県の会員が約40人いる。信濃博物学会加入の教師が多かった。

注目した会員

明治39年に入会した会員の中から、私なりに注目した会員の何人かについて述べおく。

中原源治は明治36年吾妻山でハクサンシャクナゲの新種を発見した。新種を発見するくらいだから、

相当の研究者だったと考える。明治 38 年武田久吉の紹介で博物学同志会に入会。明治 39 年 1 月に山岳会に入会している。武田久吉の誘いと思われる。山岳会入会時の連絡先は東大植物園となっている。東大植物園の資料では、中原源治の遭遇は傭員で、経歴は分からぬ。武田久吉は研究のために足繁く東大植物園に通つて中原源治と知り合い、いち早く山岳会に誘つたのだと思われる。明治 40 年名簿には中原源治と並ぶように**松村任三**（1856～1928）の名前がある。松村は明治 21 年帝大理科大学教授、後に植物園長も担つていて、当時はすでに植物学の権威だった。山岳会の名簿を見た松村の心中は複雑だったのではないか。**牧野富太郎**（1862～1957）は『博物之友』誌上で植物志編纂のために標本の提供を求めており、山岳会もその目的での入会かと思われる。

辻本満丸（1877～1940）は発起人以外では初めて山岳会の幹事になった。帝大の応用化学科を卒業し、工業試験所で油脂を研究した。初期の薬師岳、鋸岳など、当時としては探検的な山に登つた。しかし、山の著作を出版することはなかったので詳しい経歴や登山歴は分からぬ。

磯野敬（1868～1925）は勝浦の山林地主である。明治 39 年博物学同志会に自分から入会しており、山岳会にも自分から入会したと思われる。大正元年、小石川区大塚窪町に建てた邸宅が「銅（あかがね）御殿」と呼ばれ、国の重要文化財に指定されている。

眞下瀧郎（飛泉）（1878～1926）は軍歌「戦友」の作詞者として知られる。明治 40 年名簿に並んで載る**南部慎太郎**とは京都の高等小学校の同級生だった。眞下は京都府師範学校時代から『文庫』に投稿していた熱心な小島鳥水ファンだった。眞下瀧郎は小島鳥水からの山岳会への協力要請に応えて、南部慎太郎を誘つて入会したものと考えられる。

明治 40 年名簿に**志賀重昂**（1863～1927）と並んで**山崎直方**（1870～1929）、**小川琢治**（1870～1941）、**田中阿歌麿**（1869～1944）の錚々たる地理・地質学者がいずれも特別会員として載っているのは高頭仁兵衛の協力依頼による。明治 39 年 3 月という早い時期に入会して、『山岳』への執筆、山岳会大会での講演など、会への協力を惜しまなかつた。明治 43 年志賀重昂の別邸・代々木四松庵で山岳会の新年晩餐会が開かれ、著名会員が集まつて大盛会だった。

河合篤叙（1867～1946）は折から上京中の明治 39 年 4 月、博物学同志会総会に高頭仁兵衛の紹介で出席し、羊蹄山について講演した。その折に高頭が山岳会に誘つた。北海道支部の高沢光雄氏が『山岳』第 97 年に書いた「北海道から最初に入会した河合篤叙と蝦夷富士登山会」に詳しい。

柳田國男（1875～1962）には膨大な著作があり全集が刊行されている。『定本柳田國男全集』（筑摩書房、1962～1971）は全 31 巻と別巻 5 巻から成り、別巻 5 には総索引と詳しい年譜が載る。しかし、その年譜は柳田が山岳会の会員であったことには触れていない。新版の『柳田國男全集』の年譜では、柳田が山岳会に入会したことや山岳会の大会で講演したことに対する記述がなされた。柳田は山には登らなかつたが、『山岳』を熱心に読み、自分の研究に役立てていた。

佐久の豪農**神津猛**（1882～1946）は小諸時代の**島崎藤村**（明治 40 年名簿では島崎春樹）の後援者で、『破戒』の出版を支援した。小島鳥水は『山水無尽藏』の序文を藤村に頼んだ。その縁で山岳会への協力を依頼したものと思われる。『藤村全集』の「書簡集」に藤村から神津猛宛てた手紙が掲載されていて、「山岳会は——横濱西戸部町六百三十五番地の小嶋久太（鳥水氏）宛にて御入會被下度」と書いており、藤村が神津猛を山岳会に誘つたことを裏付けている。

小島鳥水は明治 38 年御嶽山で**清沢巳未衛**（1884～1916）と出会つた縁で、翌年穗高町の清沢宅に泊まり常念岳に登つた。その関係で小島鳥水は清沢巳未衛に山岳会入会を働きかけた。清沢巳未衛と**鶴殿正雄**（1877～1945）は木曽山林学校の第 2 回卒業生だった。鶴殿正雄を山岳会に誘つたのは清沢巳未衛と思われる。鶴殿正雄については『孤高の道しるべ』（上條武）に詳しい。しかし、そこでは鶴殿正雄の山岳会入会の経緯については触れていない。